

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学
所 属 メディア情報学部 社会メディア学科
名 前 岡部 大介
作成日 2022年3月24日

1. 責務

社会科学系，人間科学系の学科に所属し，教育・研究活動を行っている。学部，大学院において担当する講義・演習科目は，次の通りである。

[学部]

事例研究(1)(2)：3年生

卒業研究(1)(2)：4年生

街作り論：3年生

社会文化フィールドワーク：2年生(選択必修)

メディア文化論：2年生

SD PBL(2)：2年生(必修)

情報リテラシー演習：1年生(必修)

[大学院]

特別研究(1)(2)

認知科学特論

社会調査とデータ分析

また，サークルの顧問(バドミントンサークル)と，学務分掌(教務委員，クラス担任など)を担当している。

2. 理念

[概要]

学生が学習(学術)コミュニティの存在を知り、それに参加し、再生産し、ときに変容させることへとつながる機会を提供したい。

[本文]

教育理念は、次の4点である。

(1) 論理的な「文章をつくる」ことのできる人を増やしたい。

初年時の演習科目(「情報リテラシー演習」)において、アカデミック・ライティングの典型的な構造や、レポート・論文で用いてほしい言い回しを伝えている。具体的には、学生にスモールステップで書いてもらった(良く書けている)レポートを匿名で取り上げ、学生に推敲の過程を見てもらいながら修正する。

事例研究、卒業研究においても、「文章の構成/執筆様式」に少しでも敏感になるよう、事前に執筆要綱や注意事項を示すとともに、(自他の論文の)修正プロセスを slack で追えるようにする(方針 A 方法 1)。大学院生に関しては、学術論文を投稿できるよう、必要な資料、方法にアクセスしやすい学習環境を整える(方針 C)。

(2) 知(性)は個人の皮膚の内側だけで生じるものではなく、集合的に生成されることを体感してもらう機会を提供したい。

例えば「社会文化フィールドワーク」ではグループワークとチームティーチングを取り入れ、ある現象の捉え方や「興味を持つポイント」が画一的なものではないことを伝える。また、学生個々人の「フィールドノート(観察データなど)」に対するコメントをグループ単位で(メールを用いて)行うことで、他学生のデータと自分のデータの関連や、他学生のユニークな視点を可視化する(方針 A 方法 1, 2)。

また理念 4 にもあるように、学内外のコミュニティ内での集合的な学習を重視する(方針 B)。社会科学系のデータ分析、特に観察やインタビューで得られたデータを分析する際に、学術コミュニティにおいてよく用いられる「象徴的な『道具』」を学生とともに使用したり、共通の古典文献を読んだりすることで、学術コミュニティに周縁的ながらも正統的に参加する機会を提供する(方針 A 方法 4, 方針 C 方法 2)。

(3) 学習者中心の学習環境をデザインしたい。

おぼろげながらも学生が生成した「興味があること、考えたこと、実践したこと」をもとに、教員が学生と一緒に熟考する時間や過程を大事にする(方針 A 方法 3)。学生の取得した観察・インタビューデータなどを学生と一緒に面白がり分析していく(方針 A 方法 3)、興味に突き動かされた学習(interest-driven learning)のデザインを実現する。

あわせて、講義において(学生に事前にアナウンスしたうえで)休憩時間を適宜とること、講義時間を超過することを避けることを重視する(方針 D 方法 1)。講義やゼミ時間外に、slack やメールなどの

媒体を用いてなるべくコミュニケーションを絶やさないようにする(方針 D 方法 3).

(4) 学生が学術的なコミュニティに参加する機会を提供したい.

大学院生の学会参加は継続的に促進する(方針 C). 同じ領域(認知科学, 認知心理学)の, 他大学の研究室をゼミの学生と一緒に訪問したり, 相互に研究発表をして議論したりする機会を少なくとも年に 1 回は開催する(方針 B). 類似の関心を持って調査, 研究をおこなう人たちの存在を知ること, 学生自身の関心を個人に閉じたものではなく, より広い文脈におく狙いがある. また, 年間 20 から 30 程度, 学会や研究会の情報を研究室の slack で共有し, 学生の関心に類した調査, 研究を行なっているコミュニティがあることを示す(方針 B, 方針 C).

3. 方法

[概要]

2で示した理念「学生が学習(学術)コミュニティの存在を知り、それに参加し、再生産し、ときに変容させることへとつながる機会を提供する」ことを実現するために、以下の A~D の方針で学習環境をデザインしている。

[本文]

方針 A は次の通りである。

学生の考えたこと、実践したこと、集めた資料を面白がり、教員が熟考することで高みを目指す

上記の方針を推し進めるために、次の4つの方法を用いている。

方法1：学生の事前提出物や発表成果には、かならずメールや slack でコメントを送る

方法2：学生の振り返りの中から、講義内容を発展させるものを選択して次回講義で紹介、返答する

方法3：学生の持ってきた考え、視点、データをひたすら見る、可能ならば学生と一緒にみる

方法4：社会科学系の、特に観察やインタビューで得られたデータを分析する際に、学術コミュニティにおいて「象徴的な『道具』」を学生とともに使用する

方針 B は次の通りである。

他大学の研究室と合同で研究発表会を行い、学習コミュニティを可視化する

上記の方針を推し進めるために、次の方法を用いている。

方法1：他大学の大学院生と教員と、合同ゼミをおこなう

方針 C は次の通りである。

大学院生が論文を書くように学習環境を整える／学部生が論文を読めるようにする

上記の方針を推し進めるために、次の方法を用いている。

方法1：大学院生、学部生問わず、ゼミ生からのリクエストには全力でこたえる

方法2：大学院生に、古典の重要文献を読む学習環境をデザインする

方針 D は次の通りである。

学習環境デザインにおいて「時間」を重視、工夫する

上記の方針を推し進めるために、次の方法を用いている。

方法1：講義の時間内に必ずおさめる

方法2：講義では30分くらい話したら、(質問の時間をかねた)プチ・ブレイクタイムをしっかりとる

方法3：学生、ゼミ生との何気ない雑談の時間をとる。講義時間外でも、オンラインであれキャンパスのどこかであれ、常に開いている(「忙しいけど暇そうに見えるようにする」)。

4. 成果

方針 A : 学生の考えたこと, 実践したこと, 集めた資料を面白がり, 教員が熟考することで高みを目指す



学部の演習における授業評価アンケートの自由記述欄を見ると, おおよそ 90 名中 3 名から 5 名程度が, 教員の姿勢を好意的にとらえたコメントを記載してくれた。

方針 B : 他大学の研究室と合同で研究発表会を行い, 学習コミュニティを可視化する



学生の学会発表につながった。

修士課程で所属していた学生が, 東京都市大学の大学職員になった。

修士課程, および(国内外の他大学も視野に入れた)博士課程への進学を考える学生がわずかながらでてきた。

方針 C : 大学院生が論文を書くように学習環境を整える / 学部生が論文を読めるようにする



修士課程の学生が学術論文を執筆し, 採録された。

学部, 修士課程で所属していた学生(博士課程は他大学)が, 大学教員になった。

方針 D : 学習環境デザインにおいて「時間」を重視, 工夫する



学部の授業評価アンケートを見ると, 時間配分に関して好意的に評価する学生が多かった。

研究室で運営する slack 上で, 学生間, 学生教員間のやりとりが増えた。

5. 目標

[短期目標]

短期目標は、次の通りである。2022年度の前期の講義、演習での達成を目指す。

学生が認知(cognition)的な活動に参加するために、より積極的に話しかけ、情動(emotion)を刺激する

[長期目標]

長期目標は、次の2点である。

役に立つ、立たないといった二分法的な考えではなく、興味に突き動かされた学習を重視する

あたりまえで日常的なやりとりに現れる、人びとの巧みな知を面白いフィールドワーカーを育てる

【添付資料】

- [1] 授業評価アンケート : https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort_6/
- [2] 学生実態調査 : https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort_6/
- [3] シラバス : <https://www.tcu.ac.jp/academics/syllabus/>